

職人の技を受け継ぎ歴史・文化を継承する 金沢職人大学校だより

◆職大修了生のアンケート結果を紹介します！

前号でも紹介しましたが、昨年、本科と修復専攻科の修了に際して研修生に初めて無記名のアンケートを行いました。それによると、「入学動機」について「自分で希望」が最も多く、本科65%、専攻科71%であり、次いで多いのは本科は「上司の勧め」30%、専攻科は「先輩の勧め」17%である。本科も「先輩の勧め」15%と多いが、専攻科は建築士が多く、それにより少し差があるようです。

研修で良かった点(自由記述)として、本科は「普段学べないことを学べた」が多く、それは職大の大きな研修目的としているところからです。修了生の評価からも、職大の研修の仕組みや内容がそうした目的を果していることを表しています。その他には、「講師や同期の仲間との出会い」をあ

げています。これも教育、研修施設としての大切な側面です。専攻科は「他の職種との交流ができたこと」をあげています。これは、同科が職種の異なる研修生によるグループで調査研修を進めていることを評価しているものであり、それが成功していることを示しています。「良くなかった点」はほとんどみられませんでした。

今後の提案については、「他科との交流」(本科)、「研修段階のプログラムの早い段階からの説明」、「実際の歴史的建築物による研修」、「WiFi環境の整備」などがあげられました。これらについては職大として検討すべきものですので、下記の「活性化プラン」の見直しの中でも検討していきたいと思っています。(川上光彦)

「金沢職人大学校運営委員会」を開催しました

設立20周年に当たる平成28年度に、当校が抱える課題に対応するため、有識者等からなる「金沢職人大学校運営委員会」(以下、委員会)から「金沢職人大学校活性化プラン」(以下、活性化プラン)を提案いただき、その方針に基づきその後の運営を行ってきました。「活性化プラン」策定後5年を経過したことから令和3年8月26日に委員会を開催し、実績の報告と今後の方向性を主な議題として議論をいただきました。

当校の主な課題としては、職人数の減少に伴う、

一部の科での定員未充足、修了生の活躍の場の創出、伝統的建築技術のアーカイブの整備などがあげられます。今後、「活性化プラン」の見直しなどを含めて検討していく予定です。



市民公開講座

職人さんの指導を受け、作品作りや実習を体験し卓越した職人の技や文化を理解していただきます。

今年は、コロナ禍の下、昨年と同様に定員を少なくして10月3日(日)に開催します。今年も多くの市民の皆さんに応募いただきました。



石工科のハンマー作業



板金科の彫金作業

庭園探訪

日本家屋と庭園は一体のものであり、欠かせません。庭師の目から見た庭園づくりについて解説いただき、管理の工夫や苦労話等を聞きながら、歴史都市金沢の庭園を見学する企画です。

今年は11月7日(日)に、西田家庭園玉泉園 成巽閣飛鶴庭 秋声庵庭園、寺島蔵人邸庭園の4か所で開催を予定しています。



松風閣庭園の霞が池

◆本科：第9期生(昨年10月入学)の研修内容

本科の9科計43名が、月数回、夜間や土日に研修しています!

石工科

ビシャンなどを使って御影石の目を整える加工を行っていました。修了生の紹介で入学した研修生からは、日頃、仕事では行わない手作業での加工等、大変勉強になるとのことで、強さ加減によっては欠けてしまったり、細かく丁寧な作業に汗をかきながら取組んでいました。講師や生徒の中には、県外の石材産地で5年間修業した方が半分ほどいて仕事に対する熱意に驚きました。



講師の指導を受けて研修中

左官科

左官科では「中塗り墨出し」の作業を行っていました。現在は直に1~2ミリ塗る、薄塗り工法が主で、今回の5~10ミリ塗る厚塗りは滅多に無い作業だそうです。中塗りが乾くまで約1週間かかるそうで、その後、漆喰の白・黒・群青・朱、大津磨きを上塗りしていくそうです。

講師の方々によれば、研修生の皆さんは大変真面目とのことで、研修生も楽しく作業を行っていました。



土壁塗りの研修

大工科

第2・第4日曜9時から17時までで丸一日授業を行っています。現在「折上げ格天井・規矩術」の授業をしていました。当日は金沢で35.1℃、日本一暑い場所となり研修生8人が汗をかきながら天井板を作成していました。今回のような格天井は通常の仕事の中では作成したことが無く、板で曲線を作る伝統的技法に苦労していました。しかしそれぞれの技術の修得に目を輝かせて取り組んでいたことが大変印象的でした。



格天井の製作の研修

瓦科

能登から片道車で約1時間かけて2人の研修生が授業を受けていました。現在は反り棟について受講しており「反り棟の解体」を行っていました。原寸図面の作成等、通常の仕事の中では行わないことを多く学ぶことが出来、いつも楽しみにしているそうです。ただ家族の協力が無いと難しく、毎回必ずその日の内に自宅に帰るそうです。頑張れ!

今回は「解体調査」の授業とのこと。



講師の指導による研修

造園科

5人の研修生が「延段(のべだん)」を製作。飛び石とは別に敷石や自然石の小石を組み合わせ、景色に変化をつけ、同時に歩幅に余裕と安心感を与える園路工法。通常1人で1日約2㎡を製作とのこと。苦労しながらも、現在の仕事では滅多に行わない伝統的技術が学べて勉強になり作業に没頭できて楽しいとのこと。

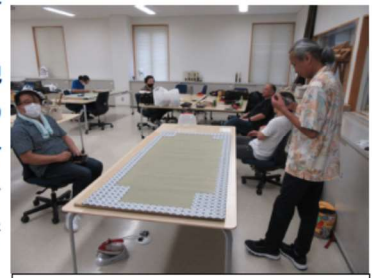


延段の研修風景

畳科

「四天拝敷(してんはいしき)」を手縫いで製作しました。主に寺院で礼拝の座具として使用され、有職畳の一つ。四天は四天王のことで四方を守護する四神で畳の四辺に持国天、広目天、増長天、毘沙門天を紋縁で表す。日頃の仕事で製作することは無く、初めて製作するとのこと。

研修生は遠隔地から来られ、この時期なので乗り合わせではなく、それぞれ各自の車で来られています。



畳科の研修風景

建具科

金沢特有の「キムスコ格子」を製作していました。はめ込み式の連子格子で主に茶屋で使用され、中から外がよく見えるのに外から中は見えづらい、見た目も美しい格子です。研修生4人は県南部からなので今まで知らなかったそうです。ほとんどが手作業なので大変苦労していましたが、繊細な作業で面白いとのこと。カンナの削り屑でもほぼ形状が等しい格子ができるそうです。さすが!!!



繊細な建具の格子製作の研修

表具科

「総裏打、張込」の授業を行っていました。裏打ちとは作品本紙の裏に紙を貼り付け、しわやたるみを防いで補強することです。丁寧に掛軸の裏に刷毛で水分を含ませていました。

取材当日に、創建650年のお寺より『地獄・極楽絵図』10幅の修復依頼があったそうで、これから約1年かけて修復していくそうです。

実践的な研修でとても勉強になりそうです!



研修の様子

板金科

「銅板による屋根葺き」をしていました。一文字葺きと廻し葺きとを組み合わせると銅板屋根を製作。複数で行うと形がバラバラになるため1人の作業がよいそうですが、研修生が協力して行っていました。通常の仕事の中では年に1回あるかないかの作業で、難しい作業。しかしとても勉強になり作業が楽しいとのことでした。今日中に完成とのこと、結末は如何に!



銅板葺きの研修

子どもマイスターズクール

5月8日(土)に「木材のふるさとを訪ねて」として金沢林業振興協議会と金沢森林組合の協力で金沢テクノパーク運動広場周辺山林にて木材の生育環境を学び、間伐・枝打ちなどの作業を通して体験・見学しました。父兄や講師も含む46名参加。組合担当者が切り倒した木を生徒全員が協力して滑車を使って引っ張りあげたり、最後には木を使って名札作りも行いました。



◆修復専攻科：第8期生(昨年10月入学)の研修内容

2021年4月から片町にある金沢学生のまち交流館で現地実習に取り組みました。建物は市指定保存建造物の旧佐野家住宅で、近代の建築技術を取り入れて1916年(大正5)に建てられた近代和風建築。2階にある座敷の障子を教材に基礎的技術の修得に取り組みました。

研修では1つの障子をつぶさに観察して調査用紙に描写し、寸法を測定して記録。この結果をもとに図面を描き、どのような技法で障子が造られたのか、特徴を捉えることをねらいとしました。

実習では指導員だけでなく、自分が研修生の時に学んだことを後輩に伝えてもらうため修復士にも協力を求めました。組み立てられた部分の技法は隠れて見えないため、建具の修復士に上棧と下棧を取り外してもらい、解説を聞きながら技法の特徴を学びました。

図面は手書きで作図した。

課題を終えた研修生からは「見ているように見えていない」とい

た声がありました。観察することの意義を理解し、調査結果を伝える基礎的技術を身に付けたことが窺えます。

湯涌江戸村の見学研修では、石倉家で民家の見方について講義を受け、町家、農家、武士住宅を見学。各建物の特徴を把握しました。



建具の調査の様子

歴史的建造物の紹介

旧平尾家住宅は1860年頃に建築された武士住宅です。元は本多町にあり、旧江戸村を経て金沢湯涌江戸村に再移築。調査を修復専攻科3期生と5期生が担当。その結果、藩政期に建築時の姿を明らかにすることができ、明治期には節約の御布令で式台が失われたこと、大正期には石川県家屋制限令によって板葺から棧瓦葺へ葺き替えられたこと、戦前には道路拡幅に伴って主庭が縮小されたことなど、近代化と共に変遷した背景を把握しました。3期生と5期生たちの成果によって、金沢市指定有形文化財としての価値をより高めることにつながりました。



修了生の研究会/木羽板研究会

2013年に修復専攻科修了生の瓦・板金職の有志5名で立ち上げ。きっかけは、森紙店の板葺屋根を修理する職人がいなくなったことでした。幸い志賀町に木羽板製作職人がおられ、原木の見分け方、木羽板のへぎ方、板葺屋根のウラガエシの仕方を学び、森紙店の修理に携わる。永井家の移築では板葺屋根の葺き方を学ぶ。その後、市の3ヶ年の支援により木羽板製作の技能を習得。近年は市委託で、長町武家屋敷等の土塀の屋根の修復に取り組み、年末に能登ヒバの丸太を買い付け、冬場に板へぎ包丁等により木羽板の製作に取り組んでいます。(新谷信行)



木羽板製作の様子

【編集後記】

コロナ禍による影響は職大でも避けられません。昨年は市の指示もあり2箇月ほど休校措置としました。その他の研修は感染防止対策に努めながらなんとか実施していますが、県外への見学研修は中止せざるを得ませんでした。その他、市民参加行事の中止や参加定員減も行っています。お茶や謡曲の教室も一部の中止や時間減を行っています。また、職大への見学についても、参加人数を限定してもらったり、延期してもらったりしています。(M.K.)

修了生の紹介 久野誠氏

久野氏(69歳)は本科第1期生(板金)、修復専攻科第1期生で、本科講師を第6期生より担当。父親が創業した板金業を長男として継がれた。

同氏によると、金沢城や小坂神社の仕事に携わったが、歴史的建築の仕事は、昔の職人の技術を学ぶことができ、新しいものにチャレンジできることがよい。そうした仕事は少ないが、手掛けることにより、それが縁で次につながっていくものだ。最初は勉強のつもりで取り組んでほしい。教えるときには、こまめにメモをとるように指導している。そうした積み重ねが大切だ。息子が家業を継いでくれてうれしく思っている。



講師(建具科)紹介 中居克彦氏

当校講師の庄田正従氏の紹介で第3期生として入学、修了しました。第6期生から講師として担当し、講師代表も務めています。講師歴は通算約10年間です。

当初は家具屋や大工をしておりましたが、その後、奥様のお父さんが仕事をしていた平野建具店を継がれ、現在まで約32年間、建具業を行っております。

金沢匠の技能士、建具1級技能士を取得、お子様も3人います。

趣味はゴルフで建具関係の皆さんとよく行かれるそうで、ベスグロ(最もよい成績)は84の腕前です。



「金沢職人大学校だより」No. 04、2021年10月

【発行・問合せ先】

公益社団法人 金沢職人大学校

理事長・学校長 川上光彦

住所：金沢市大和町1番1号

(金沢市民芸術村の一角にあります。)

Tel 076-265-8311 Fax 076-225-8314

Webサイト <http://www.k-syokudai.jp/>

事務局：平日9:00~17:00、土日・祝日休み

